

# 「彦火々出見尊絵巻」 図像私註(六/完)

—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—

古 田 雅 憲

The Visual Thinking Strategies for “The Emaki  
of UMISACHI & YAMASACHI” (6)

Masanori Furuta

## 【はじめに】

幼児・低学年児童の古典学習のために、明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を「読み聞かせ」学習材として再構成する—その目論見は旧稿（後掲・参考文献37～41）のままに、今回は最終・巻六部分を取りあげる。

その趣意は旧稿で詳しく述べたとおり、小学校学習指導要領に言う「伝統的な言語文化に関する事項」にかかる実践的なプログラムを開発することにある。それに際して特に意を注いだのは、「伝え合う力を高める」という国語科の大目標に従う古典教室として、児童相互の「交流」を活性化する学習活動となるように、という点である。

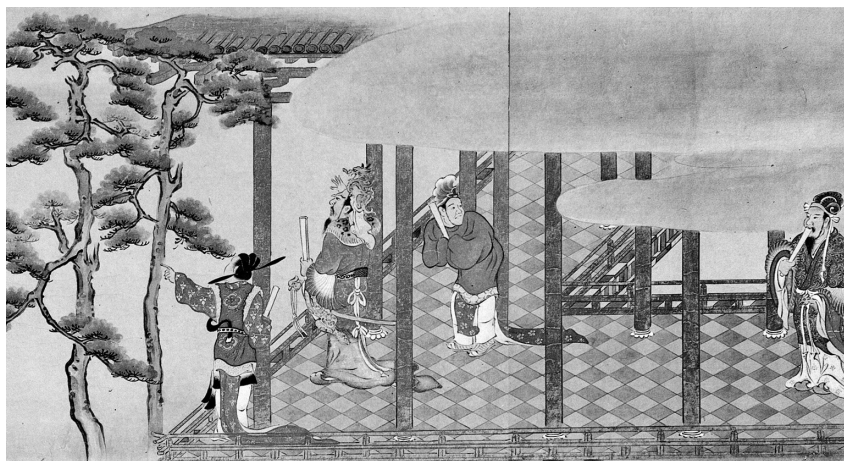
具体的には、「海幸彦・山幸彦」の神話に題材を得た古典絵画として質・量ともに秀でた明通寺蔵『彦火々出見尊絵巻』を取り上げ、まず古典絵画をよく「見る」ことを通じて、児童相互の「話す・聞く活動/交流」を活性化しようとする。次に、発達段階に応じてリライトした本文によって「内容の大体を知り」、その上で「音読すること」を楽しんだり、「国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方」について話題にしようとするのである。

ともあれ、そのようなことについては旧稿冒頭に縷々述べたことでもあり、今ここに繰り返さない。必要に応じて参照されたい。以下、さっそく巻六・各

場面について図像私註を示し、併せて詞書を踏まえた読み解きを提案したい。

### 【第二十九場面(下掲図版①)／巻六・第二紙の読み解き】

巻頭詞書（第一紙）に続いて第二十九場面となる。舞台は海宮内・楼台上の一角である。霞の間に垣間見える大屋根は紺瑠璃の瓦で葺かれ、丹塗りの部材と大柱がそれを支えている。傍らには立派な枝振りの松樹が伸びやかに並び立つ。樹の下方は曖昧に描き残されていて、さらに下方に幹が続いていることを暗示している。華奢な作りの高欄と併せて、ここが高所であることを表す工夫である。その高みから彼方を遠望している人々がいる。



<図版①；参考文献(12)による，以下同。>

中央、左手に笏を握りしめ、右手を額に翳しているのが海龍王である。烏頭の太刀を佩き、華麗な御衣・繡裳を身につけ、頭には龍頭冠を着している。肩に掛けた豹皮のショールが忍び寄る寒さを表している。

その海龍王を促すかのように、傍らの侍臣が彼方を指さしている。彼の立派な衣装は色彩も文様も美しく、その他の侍臣たちの様子もまた同様である。このようなところからも海宮の豊かさは窺われる。

彼らが遠望する先には、海の異形たちに警護された海宮の船団がある。海龍王の姫を乗せた舟が、弟宮の住む日の本へ向かっているのである。

その間の事情について、巻頭詞書は「むすめ、うみのつきやうやうちかくなれば、やんことなきみこのおほむこなり。ここにてはむませし。もとのくににてむませたてまつらむとて、はしをほかのくにのきしにつくりいてて、うふやはそのはまになんつくりたりける」と言う。実は海龍王の姫は、お腹に弟宮の子を宿していたと言うのである。そして、その子はぜひとも日の本で産ませたいとの王の願いによって、姫の一行は船出したのだった。

海龍王の親心のほども知られる美しい場面だが、物語の進展には不可欠というほどではない。ここは、幼児・児童の実態に応じては「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてよい。

### 【第三十場面(下掲図版②③④)／巻六・第三～七紙右半の読み解き】

この場面は、海龍王の姫を乗せた舟（第五紙左半～第六紙右半）を先頭に、日の本へと向かう海宮軍の行列を配した図像である。場面全体の右端には海宮内・楼台に続く砂浜が見える。また左端には産所へと続く日の本の砂浜が見える——そこは、巻四・巻五の行列図に兄尊邸裏の景色として描かれたような荒磯ではない。物語の進展に伴って、もはや兄尊のもとへは戻らないという含意であろう。その浜辺には、霞中から忽然と現れたかのような浮橋が描き添えられているが、それは巻頭詞書に「はしをほかのくにのきしにつくりいてて」と言う部分に照応する図像である。

この第三十場面は、巻六の図像部分（詞書部分を除く）は全八紙半だから、ほぼその過半を用いて描かれたことになる。長さといい、また美しさといい、巻四・巻五のそれに劣ることはない。延々四紙を費やして繰り返し描かれた波濤のうねり、その間に見え隠れる海宮軍の荒ぶる面々。画中詞に「龍王さむそへゆくところ」と言うのに相応しく、姫の出産に備えるため同行する女官たち——ある者はたおやかに髪ほつれを整え、またある者は勇ましく犀を乗りこなす。あらゆる海の者どもを描く筆の冴えは、画者の心に宿る「海」という異界への畏怖と憧憬を、やはりここでも確かに暗示するのだろう。



総勢三十二名の行列はこれまでで最大である。やはり姫の出産という一大イ

ベントを象徴する大がかりな行列図である。

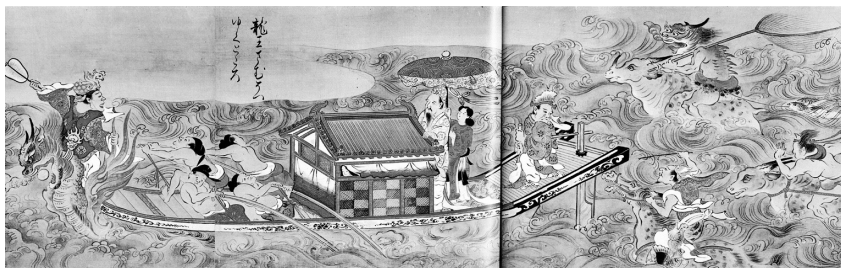
その行列末尾に遅れて砂浜に飛び込むのは蓬髪（ほうみ）の異形者らしい。両肌脱ぎに筋骨も隆と現して、細工も美しい籠（かご）を頭上運搬する体である。その左方には鯨（くじら）が潮を噴き上げ、その周囲の水面には磨羯魚（まがやうぎょ）が見え隠れする。



<図版②>

その先には、馬に騎乗する異形者や、犀（さい）を乗りこなす勇ましげな女官たちが行く（図版②）。その口縄をとる一人が人身獣頭の怪物であってみたり、また従者の一人は、途中で捕まえた魚を貢ぎ物宜しく女官に手渡していたり、不気味でもありユーモラスでもある。それとは対照的に、彼らが従う舟のうちにはたおやかな女官たちが乗り込んでいる。舟に掛けた天蓋の文様や色彩も見事である。画者の筆は冴えに冴える。

そのずっと前方を行く舟に海龍王の姫が乗っている（図版③）。大玉網（おほたまあみ）を担ぐ人身龍頭（じんしんりゅう）の怪物ら三人が近侍して警護にあたっている。その龍頭船（りゅうづな）はさすがに最も大がかりな造作で、中央に立派な屋形を備えている。丹塗（に）り材で組み上げた結構を白壁で塗り、鴟尾（しうび）を備えた屋根を緑瑠璃（ろり）の瓦で葺く。風に翻る幕間から姫の横顔が垣間見える。白地に黒の花唐草（はなからくさ）をあしらった舷（はたけ）の文様が見る者



<図版③>

の目を楽しませ、さらにその目を前方に転じれば四人の水手が、また後方とは見れば立派な舵を握った船頭が、それぞれの仕事に忙しげである。画者が筆を尽くして描き込んだ景色のあれこれは、姫の晴れの門出の場面として、いかにも相応しい出来と言うべきである。

さて、そのさらにずっと先、波打ち際に波濤碎けるあたり(図版④)。日の本の砂浜に今しも上がろうかとの体は、先駆けの一行である。産屋の番人らしき、菱烏帽子を着けた家臣が慌ててやってきては、先駆けの高官を迎えに参上するらしい。

ここに描き添えられた「橋」の図像はやはり唐突で、龍王がせっかく設けたものと詞書には言っても、図像としての面白味はほとんどない。それを渡る様を描かれた従者も何やら申し訳なさげである。やはり画者の興



<図版④>

味は、海宮軍の荒ぶる面々が逆巻く波濤のうちに跳梁跋扈する行列図を描くことにあるのだろう。「橋を渡ってやって来る」といった、ごくありきたりの景色は彼の想いを満足させなかったのかも知れない。



以上のような画註と詞書を踏まえ、この第三十場面の中から特に図版③を取り上げて、次のように再構成した文章を添えてみた。

やまさちびこは りゅうおうさまに ごあいさつした あと、ふるさと  
のくに にほんに もどっておりました。  
おとひめさまは りゅうおうさまに いいました。

「おとうさま、わたしは にほんの くくに いき、やまさちびこさま  
といっしょに くらしたいの。」

りゅうおうさまは むすめの ねがいを ききとどけました。

そして、りゅうぐうじょうの たからものを どっさり ふねに つみ  
こんで、おとひめさまに もたせて あげました。

※えを よく みてみよう

おとひめさまが どこに いるか、わかりますか？

図版②④の図像もまたそれぞれに美しい一葉ではあるが、物語の進展に不可欠というものではない。「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてよい。

### 【第三十一場面(図版なし)／第七紙左半～八紙右半の読み解き】

その砂浜を進むと、磯の小岩を積み上げた築垣と板葺きの門が見えてくる。海宮の城門・楼閣の贅を尽くした荘厳（巻二・第四～五紙）に見馴れた目には至極貧相に写るが、それはそれ、新たに設えた産所の景としてはいかにも相応しい。ただし、門前の居飼が口縄をとるのは牛馬ならぬ麒麟二頭で、さすがにこの産所の不思議な気配を暗示している。

門内に進むと泉水の立派な設えが見えてくる。仮のものとは言え、さすがに海龍王の姫の産所である。

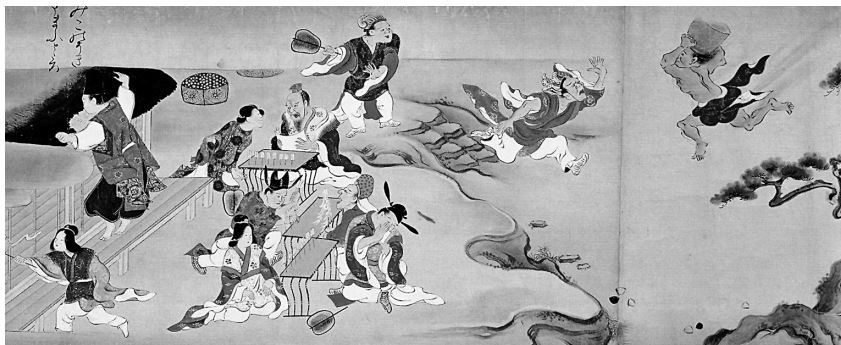
石橋を挟んで人々が対面している。右方は姫に先着した海宮高官らしい。唐風の華麗な礼服を身にまとい、垂らした裾を侍者に持たせている。頭には冠を着し、腰に大刀を帯び、また立派な靴沓を履いている。両手には笏を持しているから儀礼に則った対面であるらしい。太刀持が捧げ持つ錦の袋も鮮やかである。また左方は高官を迎える産所の責任者であろうか。彼もまた華麗な衣装を身につけ、頭には幞頭冠を被り、立派な靴沓を履いている。海龍王の宣旨を畏まって拝聴するという体であろう。自らの任の重さを改めて感じているのか、「への字眉・への字口」の表情はどことなくユーモラスでさえある。

この場面の登場する人々もまた、表情といい仕草といい魅力的ではあるが、

やはり物語の進展には不可欠ということはない。「読み聞かせ古典絵本」の一頁から省いてよい。

### 【第三十二場面(図版⑤⑥⑦)／第八紙左端～十一紙の読み解き】

この場面は三紙余にわたる長い画面である。まず「産屋の前庭」(第八紙左端～九紙右半), 次いで「産屋の内」(第九紙左半～十紙右端), 最後に「奥の厨」(第十紙～十一紙) という三シーンから構成されている。



<図版⑤>

まず第一シーンは「産屋の前庭」である(図版⑤)。最前の砂浜から一段高い地面に、八足の几が三つ設えてあるのが見える。巻子を延べ広げ何やら唱えている老師, その傍らに立て膝で座って老師に話しかける童子, 御幣を振りながら高声を上げている者, その前で真剣な眼差しで幣を立て並べている者, ちょっと疲れたか、後ろ向きになって鼻をかむ者, その前に端座して彼が向き直るのを待つ女官, 霊験あらたかな御幣を室内に届けようと慌てて走る女官など, さまざまな人物たちが姫の御産の無事を祈祷している。

画面奥には、大土器を頭上に差し上げて慌てて運ぶ屈強の男, その応援に駆けつけようと走る侍臣, 軍配を手差配する上司らが描かれている。無事の後産を促すと信じられた「甌落とし」に用いる甌の手配であろう。姫の御産もだいたい進んで、はや後産の準備やいかにとの謂いであろうか。



第二シーンは「産屋の内」である(図版⑥)。画中詞に「こさんのところ」と



&lt;図版⑥&gt;

言う。

ぴたりと閉ざした板戸の奥、姫の御産が進んでいる。中央の柱に抱きついて  
いるのが姫である。髪振り乱し、上半身も露わにしたまま、足指を広げて踏ん  
張っている。その大きなお腹を後ろから支えてやっているのが産婆だろう。口  
をへの字に結び、膝を立てて踏ん張って懸命である。その傍らでは老女官が両  
手を摺り合わせて祈りを捧げる。また板敷きの上で土器を踏み割っている女官  
もいる。速やかな御産を祈るらしい「土器割り」の所作である。産湯を張った  
檜桶の前に座っている女官は右手を中空にパッと広げている。あるいは、産褥  
の邪を払う「散米」の祈祷を捧げているのかしれない。

いよいよ御産も切迫し、女官の一人が、外に居並ぶ祈祷師たちに御幣を持つ  
よう求めている。外に控えていた女官が慌て走ってそれを届けた。その騒然と  
した雰囲気不安を覚えたのか、弟宮は屋根の葺き残しの穴から産室の内をつ  
い覗いてしまったのである。画中詞に「みこのそきたまふところ」と言う。こ  
の点、巻頭詞書に「やのうへに、うのはをなんふきければ、おそくふきて、い  
ますこしふきあへぬほどに、みこのうまれたれは、そのみこは、うのはふきあ  
へすのみこととなんつけたてまつりたりける。こはらをきりにきりてやみたま  
ひけるをおほつかなかりて、ものよりのそきてそあらまし。そのやに、うのは  
をふきたりければ、それよりのち、こうむところをは、うふやとはつけゝるな



り」と言うのによく照応している。



初めての子の誕生に際して狼狽える弟宮の姿は、さながら今日の若い父親たちのそれである。産みの苦しみに耐える愛妻に向け、心中、励まし慰める言葉さえ繰り返していそうである。この点、巻頭詞書に「こはらをきりにきりてやみたまひけるをおほつかなかりて、ものよりのそきてそあらまし」と言うとおりのである。

が、「記紀」本文に遡る本説話の祖型では、弟宮は、異形の本性を剥き出しにした妻の容姿に驚き畏れ、後ずさりしていなければならないのである。

たとえば「日本書紀（正文）」では次のように言う。

臨産（こう）む時に速（いた）り、請ひて曰さく、「妾（あれ）産（こう）む時に、幸（ねが）はくは、な看（みそこなは）しそ」とまをす。天孫（あめみま）猶し忍ること能はず、窃（ひそか）に往きて覘（うかか）ひたまふ。豊玉姫方（まさ）に産（こう）まむとし、竜に化為（な）りぬ。而して甚だ慙ぢて曰く、「如し我に辱（はぢみ）せざらましかば、海陸（うみくが）相通はしめ、永（とこしへ）に隔絶（へだ）つること無からましを。今し辱せつ。何を以ちてか親昵（むつま）しき情（こころ）を結ばむ」といひ、乃ち草（かや）を以ちて児（みこ）を裹（つつ）み海辺に棄（う）て、海途（うみのみち）を閉ぢて徑（ただ）に去ぬ。

「見るな」の禁を破って妻の異形を露わにしたことにより、弟宮は妻を失い、子は母を失ったと言うのである。またこれよりの後、海と陸との通路も永遠に絶たれたのだと説くのである。

同様に「書紀（一書第一）」でも次のように言う。

火火出見尊に謂（まを）して曰さく、「妾今夜産まむとす。請はくはな臨（みそこなは）しそ」とまをす。火火出見尊聴しめさずして、猶し櫛を以ちて火を燃（とも）し視（みそこなは）す。時に豊玉姫、八尋大熊罥（やひろくまわに）に化為り、匍匐（は）ひ透虵（もごよ）ふ。遂に辱め

られたるを以ちて 恨しとして、則ち徑（ただ）に海郷（わたのくに）に  
 帰り、其の女弟（いも）玉依姫を留め、兒を持養（ひだ）しまつらしめき。

こちらの方が妻の異形についてより具体的に記述する。それゆえに妻の抱いた恨み心もまた切実に伝わるが、一方で子捨ての主題は明確ではない。

「古事記」では次のように言う。

方に産まむとする時に、其の日子に白して言ひしく、「凡そ他（あた）し  
 国の人は、産む時に臨みて、本つ国の形を以て産生むぞ。故、妾、今本の  
 身を以て産まむと為。願ふ、妾を見ること勿れ」といひき。是に、其の言  
 を奇しと思ひて、窃かに其の方に産なむとするを伺へば、八尋わにと化り  
 て、匍匐（はらば）ひ透虵ひき。即ち見驚き畏みて、遁げ退（そ）きき。  
 爾くして、豊玉毘売命、其の伺ひ見る事を知りて、心恥しと以為（おも）  
 ひて、乃ち其の御子を生子置きて、白さく、「妾は、恒に海つ道を通り手  
 往来（かよ）はむと欲ひき。然れども、吾が形を伺ひ見つること、是（こ  
 れ）甚（いと）作（はづか）し」とまをして、即ち海坂を塞ぎて、返り入  
 りき。

「書紀」二本の記述に比べると、「見るな」の禁を設ける理由について、妻  
 が予め真相を示している点がまず異なる。そして、それほどまでに「見るな」  
 と告げたにもかかわらず裏切られた妻の哀切も、またいっそう深いものよう  
 に思われる。



妻が出産に臨んで現した異形の本性を夫が暴露してしまう「不幸」、それが  
 この物語に「神話としての言霊」を吹き込む上で不可欠の要素であることは言  
 うまでもない。その肝心要の部分で、この第三十二場面は失っているのである。

もちろん、柱に抱きついて産みの苦しみに耐える姫の形相はこれまでになく  
 凄まじい。龍や鰐に変化して蠢いてこそないが、その異形の本性は十分に感じ  
 取られるところだろう。そもそも子を産む姿を見られることじたい、往時に  
 あっては、彼女が「普通」でないことを暗示しよう。

が弟宮は、妻の姿を「おほつかなかりて」こっそり見守るばかりで、驚きも畏れもしないし、まして後ずさりして逃げ出したりもしなかった。姫方もまた、その後どうしたとも分からない。この場面の製作意図や含意については稲本(2003, 後掲参考文献5)に詳しいが、ここまで物語を読み進めてきた読者の一人にしてみれば、なんとも「オチ」の着かない結末ではある。

巻一からここに至るまで画者が筆を尽くして描き出してきた「海」という異界への畏怖と憧憬——塩椎神の靈力(巻一末～巻二)に導かれるままに辿った異界訪問の旅(巻二)、海龍王の圧倒的な富と力(巻三～巻四)、龍珠によって現された奇跡(巻五)、海陸の行き来に扈從した荒ぶる海の異形たち(巻四～巻六)などは、このシーンに至って幻のごと消え失せてしまうのである。子どもたちが「(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり」(現行指導要領)するための素材としては突然に力を失った、そう言っても良いのかしれない。

この第三十二場面の三つのシーンは、それぞれ図像として美しくまた興味深いものだが、絵巻の結末として不可欠ということもないので、「読み聞かせ古典絵本」の一頁からは省いてよい。



第三シーンは「奥の厨」である(図版⑦)。一人の女官が産室から出てきて、産湯を持ってくるよう大きな声で催促しているらしい。厨方から別の女官が提子を大事そうに持って駆け寄ってくる。先の女官はそれを受け取ろうと両手を広げているようである。厨では三人の女官が産湯の支度に忙し



<図版⑦>

い。朱漆黒漆を塗り分け、飾鋌打って美しく仕上げられた華足付き炭櫃の中では、火が盛んに熾っている。五徳には大きな鉄釜がかけられている。縁側に置いた檜桶に汲み置いた真清水を柄杓で注ぎつつ湯を沸かしているのである。

「早く産湯を」との催促に、左方の女が火勢を強めようと口を窄めて息を吹き付けたものだから、灰や煙が舞い上がっている。たまたま、風下にいた右方の女は火団扇を使う手を止め、袖で顔を隠し向こうを向いた。

戸の向こうから引っ提げ棒に立派な魚を吊した男が声をかけている。女官の一人が産室方を指差しつつ、何やら答えている様子である。お目出度い御子の誕生をはや何処からか聞きつけて、大商いを目論んでいるということだろうか。



続く画面（第十紙左半～十一紙）は産所の裏山の景色を描き出している。立派な樹々、峨々たる岩山、音もとどろに鳴り響く大瀑布が、霞の中に薄く濃く浮かび上がる。物語はいよいよ閉じられようとしている。

### 【第三十三場面(図版⑧⑨)／第十三紙～十五紙の読み解き】

詞書（第十二紙）に続いて第三十三場面となる。霞の間から兄尊の住居が見えてくる（図版⑧）。

座敷中央にゆったりと胡座をかいているのが兄尊である。弟宮の操る龍珠の奇跡に無惨な敗北を遂げたあの日（巻四末～巻五）から幾星霜を経たのであろう、黒々と立派に蓄えていた髭も今やすっかり白髪交じりである。その髭を、傍らににじり寄る孫らしき童子の玩ぶに任せている様子は、まったく好々爺然としている。そう言えば目許に刻まれた皺もまた深い。

住まいの様を見渡せば、まず、礎石を構えぬ縁台下や藁で葺いた屋根が目に入る。いかにも簡素という風である。板敷きの間に設えられた畳、縁長押や柱の白木、家人（息子か）たちが居る竹簀子の縁なども、いずれも清々しく潔い。貧相という風ではけっしてないから、それなりに財を成してもいるらしい。

詞書に「おとゝのみこは、いまにみかとなりつつおはす。このかみのみこのそうは、やまとのくによしののこほりにて、ちかひによりて、せちゑことに、にゑをたてまつるなり」と言う。兄尊（このかみのみこ）の一族（そう）は大



<図版⑧>

和国吉野郡に住んで生業をなし、節季毎に、今は帝となった弟宮の許に献上の品々を貢ぐのである。前栽の簀子台には、立派な大和瓜が籠詰めされている。これから朝廷に貢納する物であろうか。見れば、屋根の上にも立派な瓢が鈴生りである。瓜と言ひ瓢といい、兄尊の治める庄はきっと豊かな土地なのである。

画中詞に「みつきものたてまつるところ」と言う。竹簀子縁に居る家人の前には、兄尊の記した目録と思しき書類が置かれている。膝元に置いた硯と筆とを以て記したものだから、また墨の色も鮮やかなのだろう。家人たちは、それらの書類を検分しながら、献上の詳細を打ち合わせているらしい。そうして相談の



<図版⑨>

まとまった案件につき、家人の一人が振り返り、縁台下で畏まる家人に書類を手渡している。

今しも兄尊方の板戸の門を出て行くのは献上品を運ぶ荷駄馬である。籠詰めした大和瓜を四つ五つと馬に負わせ、うない髪の童子がその口縄を取って行く。籠に挿された小さな旗印がひらひらと風に翻る。さらにその先を見渡せば、なだらかな土坡の向こう側、瓜を運ぶ馬がまた一頭進んでゆく。そちらのあたりでは急な雨が落ちてきたと見えて、馬の口縄取る家人は、慌てて蓑と笠とを身につけようと紐を結ぶ体である。馬の背にもまた蓑が被せられている——それは、今上帝・弟宮に食してもらおう大切な瓜なのである。



この第三十三場面をもって全巻の終わりである。特に巻六後半に至って「記紀」本文が語り伝えるような激しくも魅力的な神話性を失った代わりに、兄弟それぞれの穏やかでそれなりに豊かな後半生—勝者たる弟宮は、妻の出産に狼狽える若い父親として、敗者たる兄尊も孫に囲まれた好々爺として—が暗示されている。弟宮が立派な王者となって君臨するなか、兄尊も立派に所領を治め、相応の生活を営んでいるのである。子どもたちのための「読み聞かせ」素材として再構成する上で、兄弟の一方だけが無惨に打ちひしがれることのない点がかえって好都合なのかも知れない。

そのような立場から、この第三十三場面の中から特に図版⑧を取り上げて最後の頁としたい。画註と詞書を踏まえ、次のように再構成した文章を添えてみた。ちなみに「やまさちも おのが さちさち、うみさちも おのが さちさち」のくぐりなどは、巻一・第七場面での再構成にも用いた「古事記」本文の援用である。このような言葉遊びめいた「おまじない」の音や響きを楽しむことは、古典の「独特の語り口調や言い回しなどにも気付き親しみを感じていく」（指導要領解説）ためには恰好の契機である。

こうして おとひめさまと やまさちびこは にほんの くにて しあ  
わせに くらしましたとき。

さて うみさちびこはといえば、こちらも いなかで こどもや まごたちと いっしょに たくさんの やさいを つくりながら、やっぱり しあわせに くらしました。ときどきは、やまさちびこの ところに、じぶんが つくった さくもつを おくって あげたそうです。

やまさちも おのが さちさち、うみさちも おのが さちさち。

きょうだいは それぞれの じんせいを しっかりと いきたということ です。おしまい。

※えを よく みてみよう

うみさちびこが どんな さくもつを つくったか、わかりますか？

うみさちびこは すっかり としを とった みたいですね。

——どこから それが わかるかな？

## 【おわりに】

昨夏、本学人間科学部は『今・ここを生きる子ども達への発達・教育支援を考える』と題する公開講座（2010年度前期）を開催した。論者もその第四講の講師を担当し、「言葉の伝統文化をつなぐ～子どものための古典教育を考える～」と題して話をさせていただいた。ここで改めて、その講座全体の共通テーマに掲げられた「今・ここ」という表現について、論者なりに一言しておきたい。

まず「今」について——それは「過去」における「未来」であり、「未来」における「過去」である。「今」という時間は必ず過去と未来の時間的連続の中にあるはずだが、昨今、その自明のことがなぜか忘れられているように思われて仕方がない。私達と子ども達の「今」が豊饒であるためには、やはり「過去」と「未来」との連続性の中で、この世界が捉えられていなければならないだろう。「昔々の思い出」と「遠い未来の夢」とは「今という現実世界」を相対化

するための大切な視点である。

また「ここ」について——それは「<ここ>ではない場所（異郷・異国）」や「<ここ>ではない世界（異界・彼岸）」への視線や意識（それは憧れでもあり、また恐れでもあるだろう）を反射した「ここ」である。「ここ」という場所は必ず「異郷」と「異国」と「異界」との空間的連続の中にあるはずだが、やはり昨今、その自明のことがなぜか忘れられているように思われて仕方ない。私達と子ども達の「ここ」が豊饒であるためには、やはり「異郷・異国・異界」との重層性の中で、この世界が捉えられていなければならないだろう。「旅への誘い」と「冒険の高揚」と「伝説の不思議」とは「ここという現実世界」を相対化するための大切な視点である。

もし私達（大人達）が「今・ここ」の忙しさにかまけて、「過去」の人間たちが思い描いた「未来」の夢や「異国」への憧れや「異界」への畏れをすっかり失念しているとすれば、私達は「今・ここ」の現実世界をどう捉えようというのだろうか。そしてまた、そういう私達（大人達）のために「今」の現実世界を相対視させてもらえない子ども達が、どのような「過去・未来」や「異郷（故郷）・異国（故国）・異界（現実）」への確かな手応えを獲得するというのだろうか。

「今・ここ」を確かに生きている子ども達にとっての「今・ここ」が、そういう平板な世界であってはならない。「今・ここ」とは、時間と空間の連続性・重層性の中に揺らめいている、きわめて陰影に富む世界である。

「古典に親しむ」あるいは「伝統的な言語文化に触れる」という学習活動の出発点は、「当たり前だと思っている<今・ここ>の世界を、時間と空間の連続性・重層性のなかで捉え直す試み」であるに違いない。



本稿を書き継いでいる間、学習指導要領の改訂を承けて、国語科の教科書も編み直された。この四月から用いられている新しい教科書の中には、『鳥獣人物戯画』について現代語で読み解いてみせる素材（『鳥獣戯画』を読む）/光村図書「国語 六 創造」）や、『風神雷神図屏風』についてビジュアルシンキングを行う素材（「この絵、わたしはこう見る」/同）が取り上げられている。



古典絵画を参観しながら、伝統的な言語文化に触れたり「話す・聞く」力を高めたりするという授業構想は、まさしく本稿の目論見でもある。このような学習材のさらなる開発や工夫を凝らした授業実践が、これから多様に展開する事を心から願う次第である。

## 参考文献

- (1) A. アレナス (2001) 『みる・かんがえる・はなすー鑑賞教育へのヒント』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (2) A. アレナス (2005) 『MITE ティーチャーズキット 1 (小学校3・4年生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (3) A. アレナス (2005) 『MITE ティーチャーズキット 2 (小学校5・6年生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (4) A. アレナス (2005) 『MITE ティーチャーズキット 3 (中学生)』(淡交社, 木下哲夫訳)
- (5) 稲本万里子 (2003) 「描かれた出産ー『彦火々出見尊絵巻』の制作意図を読み解く」(服藤早苗, 小嶋菜温子 (編) 『生育儀礼の歴史と文化ー子どもとジェンダー』 森話社)
- (6) 稲本万里子 (2007) 「描かれた結婚ー源氏物語絵巻 彦火々出見尊絵巻を中心に」(小嶋菜温子 (編) 『平安文学と隣接諸学 3 王朝文学と通過儀礼』 竹林舎)
- (7) 上野行一 (2000) 「アメリカ・アレナスの鑑賞教育 日本におけるギャラリー・トークとレクチャー の分析を中心に」(『大学美術教育学会誌』第32号)
- (8) 上野行一 (2001) 『まなざしの共有ーアメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶー』(淡交社)
- (9) 大林三千代 (1975) 『『すみよしえんき』における彦火々出見尊の説話について』(『国文研究』4)
- (10) 片山清司 (2006) 『玉井 海幸彦と山幸彦 能の絵本』(BL出版, 白石皓大絵)
- (11) 小松茂美 (1979) 『日本絵巻大成 (22) 彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (12) 小松茂美 (1992) 『続日本の絵巻 (19) 彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』(中央公論新社)
- (13) 三森ゆりか (1998) 「ドイツの言語技術教育⑦討論の授業<絵の分析>」(言語技術教育7)
- (14) 三森ゆりか (2002) 『絵本で育てる情報分析力ー論理的に考える力を引き出すー』(一声社)
- (15) 全国大学国語教育学会編 (1987) 「国語教育のための「映像」の位置」(『国語科教育』第35集)

- (16) 高橋俊三 (1993) 『対話能力を磨く－話し言葉の授業改革』(明治図書出版)
- (17) 高橋俊三 (2000) 「話し合うことの授業づくり」(明治図書出版「教育科学 国語教育」No. 587)
- (18) 丹青総合研究所文化空間研究部 (1987) 『ミュージアム ワーク・シート 博物館・美術館の教育プログラム』
- (19) DOME 編集室 (1999) 「川村記念美術館『なぜ、これがアートなの?』展が仕掛けたもの」(「ミュージアムマガジン ドーム」42号)
- (20) 永井久美子 (2001) 「弟の王権－『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」(「比較文学・文化論集」18)
- (21) 中根千絵 (2004) 「院政期文学に現れる老賢者」(「アジア遊学」68)
- (22) 西本鶏介 (2004) 『海幸彦山幸彦 日本の物語絵本』(ポプラ社, 藤川秀之絵)
- (23) 林寿美ほか (1998) 『なぜ、これがアートなの?展 鑑賞教育の手引き』(川村記念美術館ほか)
- (24) 古田雅憲ほか (2001) 「国語科教育における「絵解き」の意義と指導－さし絵を読む授業の取り組み－」(「語学と文学」37号)
- (25) 古田雅憲 (2002) 「新田文庫蔵 百鬼夜行絵巻について」群馬大学図書館報 No. 286 (群馬大学附属図書館)
- (26) 古田雅憲 (2002) 「『信貴山縁起絵巻・尼君巻』授業化の構想－絵巻を通じて古典に親しむ－」(「語学と文学」38号)
- (27) 古田雅憲 (2003) 「<絵解き>教材のねらいと特徴」(「月刊国語教育」2003.4月号)
- (28) 古田雅憲 (2003) 「<絵を読む>から<古文を読む>へ」(「月刊国語教育」2003.5月号)
- (29) 古田雅憲 (2004) 「新田岩松家旧蔵『百鬼夜行絵巻粉本』について－猫絵の殿様の画業を理解するために」(「語学と文学」40号)
- (30) 古田雅憲 (2004) 「附属図書館の新しい取り組み－特別企画展・親子で楽しむ猫絵展に寄せて」(LINE 群馬大学図書館報 No. 291, 2004.9)
- (31) 古田雅憲 (2005) 「『林原本平家物語絵巻・殿上閣討事』授業化の構想」(「群馬大学教育実践研究」22号)
- (32) 古田雅憲 (2005) 「企画展『第二回・親子で楽しむ猫絵展～<故事人物画と物語絵>編』に寄せて－」(LINE 群馬大学図書館報 No. 293, 2005.10)
- (33) 古田雅憲 (2006) 「ビジュアル・シンキングの国語教育への援用について」(「西南学院大学人間科学論集」2巻1号)
- (34) 古田雅憲 (2007) 「幼児教育における古典絵画の援用について－群大図書館蔵「新田岩松家旧蔵粉本」の学習材化－」(「語学と文学」43号)
- (35) 古田雅憲 (2007) 「映像メディアを援用した『扇的』の授業提案～幼児・児童のための古典教育を展望しながら～」(「西南学院大学人間科学論集」3巻1号)
- (36) 古田雅憲 (2008) 「新指導要領に準拠する古典教材の構想～高学年児童のための

「源氏物語」の学習～」（「西南学院大学人間科学論集」4巻2号）

- (37) 古田雅憲（2009）「彦火々出見尊絵巻・図像私註（一）—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」（「西南学院大学人間科学論集」5巻1号）
- (38) 古田雅憲（2010）「彦火々出見尊絵巻・図像私註（二）—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」（「西南学院大学人間科学論集」5巻2号）
- (39) 古田雅憲（2010）「彦火々出見尊絵巻・図像私註（三）—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」（「西南学院大学人間科学論集」6巻1号）
- (40) 古田雅憲（2011）「彦火々出見尊絵巻・図像私註（四）—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」（「西南学院大学人間科学論集」6巻2号）
- (41) 古田雅憲（2011）「彦火々出見尊絵巻・図像私註（五）—幼児・低学年児童の古典学習材として再構成するために—」（「西南学院大学人間科学論集」7巻1号）
- (42) むしゃこうじみのる（1970）「『彦火々出見尊絵』について」（「日本文学」19-7）
- (43) 山内英男（1974）「『彦火々出見尊絵』研究序説」（「東洋大学大学院紀要」10）

西南学院大学人間科学部児童教育学科